

---

# たった一つの忘れもの

伊東歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たつた一つの忘れもの

### 【NZコード】

N8547L

### 【作者名】

伊東歩

### 【あらすじ】

大地は枯れ果て、疫病が蔓延している。そんな荒廃した世界の片隅のある村。人々はいつ訪れるとも知らない死の影に怯えていた。人類の存続を賭けた話し合いで、一人の少年が口を開きました。

(前書き)

誰もが一度は耳にしたことがあるであろう神話の一つの「その前」を、描いてみました。

人々は日々、楽しい思いをしたり、うれしい思いをしたり、それは反対に悲しい思いをしたり辛い思いをしたり、そんな毎日を過ごしていました。しかし、ここ何十年もの間、人々は悲しい思いや辛い思いばかりしていました。もちろん楽しいこともうれしいこともあります。でもその数は圧倒的に悲しくつらいものの方が多いのです。人々は途方に暮れています。

「おらたちはなしてこんなに大変な思いばかりしなきゃならねえんだ？」

「疫病やら飢饉やらどうじつじつもつらいうことがかさなるんだろうか？」

「神はわれわれを見捨ててしまわれたのだろうか。」

毎日毎日、人々は悲しみの言葉を交わすばかりです。このままでみんな生きる気力すら無くしてしまつかもしれません。その前にどうにかしなければ。人々は最後の気力を振り絞つて作戦会議を開きました。大人だけでなく子供も一緒になつて参加しました。この会議で何も決まらなければ本当におしまいになつてしまふでしょう。「何かいい案があるやつはいないか？手を挙げてくれ。」

村長が会議の指揮を執ります。しかし声を出しているのは村長だけ。ほかのみんなは俯いて、じつとしているだけです。

「みんな、この会議が最後の希望なんだぞ。」

そう声を荒げても誰も発言しません。

「もうだめか。」

村長も諦めかけたその時です。一人の少年が手を挙げました。ケイブス家の長男クリスです。

「僕、村のはずれに住むおばあさんの家に遊びに行つたことがある。」

「まあ。なんてこと。あんな偏屈ばあさんのところには行くなつて

あれほど言つてたでしょ、つい。

お母さんがすぐさま口を挟みます。村はずれの偏屈ばあさんせその名のとおり有名な変わり者でした。村のはずれに住む事自体変わっていりますし、毎日何をするわけでもなくぶらぶらとしているだけです。どの家庭でも子供にその偏屈ばあさんのところには行かないよつ言いつけていました。もちろんこんな村の緊急会議にも出席していません。

「まあまあ。それで、どうかしたのかい？」

「うん。みんな病気とか食べ物がないとか困つてるつて言つたら、

『もうあれしかなかねえ』って。」

最後の方は声色を変えて言いました。おばあさんのものまねでしょうか。

「『あれ』だつて？あれつて、いつたいぜんたい何なんだい？」

少年は首を傾げました。

「分からない。教えてくれなかつた。」

それを聞いてみんなは口をそろえて「あの偏屈ばあさんめ」などと呴いています。

「もしかしてあのばあさん、自分で助かるつとじてるんじゃないか？」

一人の男が言いました。みんな一斉にその男を見ます。

「そりが。確かにあるかもしれない。あの偏屈ばあさんのことだ。きっとそうに違ひない。」

別の男が叫びます。まるで連鎖反応のよつに次々とおばあさんを批判する声が広がつていきました。物騒な言葉まで飛び出して、子供たちはすっかり怯えています。

「よし、俺が今から行つて『あれ』つてのをぶん取つてきつてやる。」

一人が言いました。

「そうだな、早いほうがいい。俺も行こい。」

そうして会議の途中だといつのに男が3人、その場を後におばあさんの家に向かいました。

「おい、ばあさん。いるんだから、開ける、おい。」

男がどんどんと扉を叩きます。

「なんだこ'うするか」。あたしゃもう歳なんだからそんなにすぐ動けるわけないだろ。ほら開けたよ。」

扉が開いた瞬間男たちが家の中に押し寄せてきました。

「ばあさん、クリスに何か言つたらしこな。この危機的状況を打破するには『あれ』しかないと。それは何だ?」

男は囁み付きそうな勢いでおばあさんにけしかけます。

「そんな怖い顔するんじゃないよ。まったく、最近の若い者は・・・」

「早くしろ。村のつまはじきのばあさんが、初めて役に立てるかもしないんだぞ。」

「あたしゃ別にそんなことに興味ないんだ。老い先そつてもないだらうしね。」

そう呟きながらのそのそと隣の部屋に入つていきました。『あれ』とこ'うものを持つて来るようです。しかしながら部屋から出できません。もしかして逃げたのではないかと男たちが心配し始めたとき、ようやく扉が開きました。

「遅かつたじやないか、ばあさん。逃げたかと思つたよ。何だ?それ。」

おばあさんは一つの小さな箱を持って現れました。パウンドケーキほどの割と小さな長方形の箱です。

「望みのものだよ。」

「それが例のものか?貸せ。」

男はひつたくるように奪い取ると、急いでその箱を開きました。

中を覗き込みます。

「あれ?」

中には何も入つていません。ひつくり返して振つてみても何も出てきませんでした。

「騙したな!」

男が「ぶしを振り上げます。しかしおばあさんはちつとも怯えません。

「だれが箱の中にあると言つた？」

「何？」

男は困惑氣味です。

「今から入れるのさ。」

「つまり、『あれ』つていうのはこの箱のことかい？」

別の男が聞きます。ようやくおばあさんはにやりとしました。  
「なんだ、みんながみんな頭悪いんじゃないんだね。そうだよ。その箱が、切り札さ。」

そうは言つても何をどうすればいいかちつとも理解できません。

「説明してくれ。」

男たちはおばあさんにすがりました。

一時間後、村人が再び集まりました。みんな手に紙切れを持っています。箱を持って帰つてきた男たちの言うとおり、紙切れに悲しいことや辛いことなど、なくしてしまいたいことを書いて持つてきました。

「みんな持つてきたな。それをこの箱の中に入れんのだ。そして蓋をして地下深くに埋める。そうすればこんな悲しい世界とはお別れ。これからは楽しく明るい日々がはじまるぞ。」

男たちの言葉にみんな嬉しそうです。これからのことを考えるとじつとしてはいられないくらいです。男たちのいうとおり、紙切れを箱にしまい、ふたをして、地下深くに埋めました。するとどうでしょう。どんよりと空を覆つっていた雲は晴れ、作物は力強く芽を出し、みんなは健康で何をしても楽しく思えるようになりました。おばあさんは一躍村の英雄となりました。人々を救つた箱はおばあさんの名前をとられ、人々の守り神のよつた存在になりました。しかし、3人の男たちは一つ忘れていました。いや、気づいていながら実行していなかったのです。箱の説明をしてくるとき、お

ばあさんはたしかに一つ忠告していました。

「いいかい？今言ったようにこの中に悪いことを詰め込むんだが、一つだけ、これだけは必ず入れとくんだよ。それは、『希望』だ。なぜかつて？もし何十年、何百年後にこの箱を見つけた人間がうつかり開けてみな。世界は一瞬で闇に閉ざされちまう。そのときこの希望が唯一の救いになるんだよ。もし入れ忘れでもしてみな。箱が開けられた世界は、今度こそおしまいだ。」

これからどれだけこの平和が続くでしょう。そんな心配をする者は誰一人といません。今が平和であることに満足し、先が見えなくなっているのです。たった一つの忘れ物。それは、この平和な世界にまったく必要のないはずのもの。男たちが後悔する日はいつになるのでしょうか。空からは不必要なほど眩い光が降り注いでいました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8547/>

---

たった一つの忘れもの

2010年10月8日14時45分発行